背紐

完

ヲ9
911

門 加8
號 911
卷

昭和十九年四月十日 購入

背紐序

什麼と問ハ何也と解其なぞらへ古き代より云も
て遊あり隠語のたかちを知されは聞もまた迷ふの故な
異國にて謎とりあるる行燈香炉をまぐいまたけあき
人りとくさとあり我朝のもたとも見たあとハ侍從
大納言公明卿の大覚寺殿にて作りあひ近習の
人々とき〻てたのあるるとそすへてもつてげに聞も
るも才たくふけハ如すいかなる其物彼物と品さだめ又
思なるもきハあらぬきそうでいひのあるもいとをか
此卷々上坂氏宮古ゟ傳へ田舍ゟ聞珍なるもと陳め

紅葉山文庫

宮城文庫

夕昏集め予が序作れとをこつ〳〵返一見れば
おもひたゞ獨笑して窓うつ雨の淋きを忘る實よ
老さ日少き月雪花の席よ交はる餘興ともなんか
卷の端に背紐とかゝ是什麼と問といまゝ何をと
こたへたゞ其まゝ書三首の筆を加へるも嗚呼かゝ〳〵
あれこ　未のとし　五月以求子書

宮城文庫

隱語

一人一箇口　心中懷不朽
右恩字

朝鮮國謎

上八下八　王人在中
右七左七　横山倒出
右義婦

忘吾語　无手搖
右謠字

竪三点横一点　横三点竪一点

宮城文庫

右山王字

一人立三人居　兩口並戴一字

右儉字

半月又半月　上有乘川田

六口共一室　下有戴田川

右用字

渭北春天樹　江東日暮雲

右藻字　心渭北春天除也　江東日暮ノ〻藻也

岩山崩裂　篁竹斷裁

姜女既去　孟子未來

右硯蓋字

困水枯渴後　鱄魚死去空

扉破戸猶存　翁衰不使公

右團扇字

惜花間紅日西墜　閉朱戸不見多才

倚闌干東君已去　悶無心懶傍粧臺

右門字

九横六直　諸人不識

問朱文公　猜了三日

右晶字

木了又一口　非杏又非呆

若作杏呆猜　不是真秀才

右極字

十字頭上佳両点　勧君莫作丰字猜

若作丰字猜　不是真秀才

右隼字

一字十四口　両口成丁両口小

右圖字

新選何曾

田子九けい冨士のくも　田子のけぃ残る　ふしのくも残る　芋と解こ

瀧乃響よ夢ゆめと驚く　たの字を引はひきこ　きの字を引はひきこ　夢の驚ちさめる　あい鮫と解こ

ろはにほへと　いの字なき故　いなかの　岩梨と解こ

ろ、いとはとの間をある故　岩間の百合と解こ

いろはなく　かんなをかけとり故　鉋かけと解こ

ろろ　ろの字無ス故　奈良風呂と解

いちごいいなり　覆盆子　岩梨　いいなりなれは　児と解こ

破き蚊帳　蚊入ゆゑ　蛙と解こ

前を目あきこ後も盲　見る目と見ざる目ゆゑ　蚯蚓と解こ

塵々なり　第しころとりの詞あて　鶏と解ス

鑄物師　いの字をかなつ〻ら故　鮎と解ス

田　籾の地とり心意あて　紅葉と解ス

何も漆のあるとき　塗てあけとり詞あて　塗桶と解ス

かきの中乃篠　かとときの中あさてを入る故　鵲と解ス

なぜる酔ふ　強ひられし故の意あて　椎茸と解ス

田舎人乃声　荒る故　鉛と解ス

二十人木まはる　茶の字なり

狗子の湯あび　大をこでる意あて　紅草と解ス

山の猿くりまはす　山の去くとりとの間はすなる故　藥と解ス

五百羅漢寺

鶴　田鶴とり名ある故　手綱と解ス

野中々駒のすみか　原の牧とり意あて　勒脚と解ス

御恩莫大　ししあて扶持を多く賜ふ故　縁高と解ス　巻の名

ぬれ文　ほて見る意あて　乾海松と解ス

夏のむし　火を取の意あて　燭と解ス

一字千金　師の恩とり意あて　紫苑と解ス

通りさ角ふ一拳　行ずが打あて　雪駄と解ス

たまつさの中なれば　たまつさの中なれば　松と解ス

四々十六　八八の意あて　ぞうもちと解ス

女房　尼ゞ先の意あて　尼ゞ崎と解ス

五百羅漢寺

こしかた

隱れ笠（かくれがさ）

東面（とうめん）

娘子傾城

丸きとも

四國の刀

燈火消んとす

朗詠の句

泉水無くして龍かへる

憂しやたゞ脚も休まぬ古郷

かつてもちろく山路なりけり

いろはの二の上をふの字に文と解し

知（しる）の意あて白砂と解し

卵の面（おもて）とり意あて鶉と解し

娘子ひめに其身をうる故姫瓜と解し

解（とき）を取とり意あて炭斗と解し

あハ泡（あわ）ぬきいよ（とき）とき（とき）あて四国の片名

なる故麻糸と解し

油盞の意あて油土器と解し

和哥待裂の意あて沸し酒と解し

泉の水を取は白すりとう反れはうりなる故

白瓜と解し

又旅の意あて木天蓼と解し

近衛家蔵書

ちちくれ中のうぐひすの尾をすなる故

尾（を）ありなるもの

七九の中を八にうぐひすの尾をすなる故

薄（すすき）と解し

又ふ雨の意あて矢鏑馬と解し

竹の中乃雨

梅の木を水の意かへよ

梅の木を汐の意かへれは海の字と解し

嵐を山を去て軒の風なあり

嵐の山を去ハ風に軒の篇なる車なれは

風車と解し

道風みちのく紙を山とり字を

道風道のく上の山とり字を昏（かく）

嵐をいの字は解し

みやつこひとなる身捨

みハくひくひなれハハすりみを捨し

しいさらはまま引をあるもの

志はをさらはまま変ハをいの字故八の橋

と解

なる

ちこてゝみたのしやゝのあれはしたと

まのあいだなれとも身を尾清めれ

唐の神精進あて唐紙障子と解し

うぐいすとる雪を絶せぬ

かきのう（きのれハきの字にを元日あるを常

なる故）狐と解し

鷹心あるて鳥をとる

應とり字を解なり

近衛家蔵書

三輪の山もあらしの月を
かけもたなびく

うゝ中乃かへる

竹生嶋なる山鳥もなゝ

練糸のまもすゞ

因果歴然

火をもゝ常入山へ

三里半

ゝゝ朝日明日晩日

夕まぐゝ

風見ゝ朝

杉間くゝき意みて杉枇と解ゝ

卯と巳との中たつたつ龍と
せは 蘿と解なり

竹生嶋山鳥なゝれは 笙の字と解ゝ

解が大事といふ意みて 徳大寺と解ゝ

報いぬとゝ語語まて 猟とゝゝ

谷を点ゝはあかゝ乃人ゝは請する
伝て 明り障子とゝゝ

四里みかゝ意みて 樹靠とゝゝ

逆月の意みて 盃とゝゝ

あかるいよ寝るみて 茜とゝゝ

住初乃人ゝ朝 墨深乃袈裟解

なゝを立十三

門を西方ゝ立る

花天狗

をなゝまあゝは春秋冬ゝ

手員 又手惧

御前ゝ侍ゝゝ

暦

柚を皮ゝかゝ

河風

櫻所ゝゝ開きたり

なゝを立十三解ゝ十三を九四なる故
ときゝ櫛とゝゝ

あハせ戸みて あはゝ紙とゝゝ

獨樂とゝゝ

夏如退の心みて 棗乃樹とゝゝ

千しほと解なり

御用待みて 五葉松と解ゝ

日暮の意みて 燈燭とゝゝ

酸寒とゝの意みて 炭斗と解ゝ

河風を水を引く故 水路とゝゝ

花開咲みて 花紫とゝゝ

鐘の音 簦の目九つ
春は花 夏は卯の花 秋は紅葉 冬は紅葉の下くる水
上をこれは下 あり 下を見れは上 あり
母のちゝを通りて子の肩 あり
ほう高くゝ刀よひをたゞくゝ
かいたり
らゝをくゝの先たゞの中 あり
上を上 あり 下を下 あり
喜撰々哥をせんもちくうゝもち
秋の月乃暁雲 あり（多分如）
十里の道をけさかへる
難波乃うすみ
沖乃釣舟浦 よすする

時五四 あて 口き 櫛 とんくゝ
四季川 あて 敷皮 とんくゝ
心を上下 母子 あて 一 とんくゝ
ほゝ（ゆゝ）かくな（肩） 日を長くかゝ月
わゝづきと解なり
らゝをくゝの先を らの字こたゞの
中 あおけど たゞひとまとくゝ
上下 あて ト（うらなひ） の字とんくゝ
せんもちくゝ 奇もちくゝ バ 喜の字こ月暁
雲 あ 薔薇（きば） ハくてきこ 因て 木枕（きまくら） と解
十里を二五里とかくる 日さ及ハ さけまて 燭（ともしび） 醪（さけ） とんくゝ
あゝをかくゝたの高 あて 長袴（ながはかま） とんくゝ
海士（あま） 蛟（みづち） の高 あて 蛙（あまがへる） と解

費長房の果物
ひつゝよ角なり
露霜 おかゝて 萩の葉をちる
火鉢の下 あすゝかゝら
臆病武者の軍評定
上もなき思を佛説 あふ
十三乃やせ子
海の道十里 たゞ
あくさあさりぬさりなぶと
ぬさりなぶ
妙机の上ゝ源氏の九ゝ巻
楊枝の先 あ 血つきこうり

費長房の果物々窪なり ひつゝの
つのなきゝ ひゝなる故 窪（くぼ） 麥（むぎ） とんくゝ
つゝ（下）もおかゝは つの字こ おきの木な
れ いきなる故 月（ゆき） とんくゝ
火鉢の下をもちゝ すゝのろゝらとハ
すの字なる故 蕙（すゝのろ） とんくゝ
引氣 あて 挽木 とんくゝ
思の上なれハ 心の字こ 佛説なふた 経
なる故 心経 とんくゝ
十三ゝ九四こ やせこを 餓鬼なる故
串柳（くしやなぎ） とんくゝ
濱九里 あて 蛤 とんくゝ
のきぬれと高のぶ あて 軒の垣根 とんくゝ
ふ机の上ハふの字こ 源氏九の巻を須ア
なる故 妙 すまとんくゝ
ちやうじ あて 丁子 とんくゝ

宇治橋の上にて伊豆守に討れ
よりまさを刀をもてこうり
大秦と解す

野中の雪
ちら〳〵ちら〳〵ちら〳〵と
ちらつくれまるるゆゑの夕かほ
金のもーらス綱つけて綱をハひらて
もーらもて

雀が理をもちなが〻妻をとれ
されとも子々孫の手あてをなれ
一の谷の合戦に一の名を挙し九郎判官よ
熊谷次郎直実是ハそこなる人合せ
色ーあて鵠とれ〳〵

太鼓射ぬいて場中まわる〳〵
谷の水柱ながばとけぬ

のもりのときこの中へ入る故 柚の木と解す
八塩の鮑とかく 一名聖徳太子初笑の歌
とも云 南都法隆寺縁り
金 㐌 十 細の意にて 針の字と解す
すゝめ ア をもちてめをとれハすゝ ア ここの
字をそれの下へ入れはそこなる故 硯箱 とかく
いちのいの字九郎の九の字ハまゝ一の
くー一の名をあたゝ反合せも倒よむ

たいこのいの字をあ字はたこ〻ゝをを中よ
わくあ字 たたこ〻とかく
たこをたゝこつらゝなるだとけるハら
の字あ字 蹈鞴 と解す

山のゝ山の山をたゝなすせはらゝこをを大
とゝを二四季なる故 唐錦 と解す
御僧の寮を庵なりもれ忘をとん なる
行燈 とかく
いろはのにの上にはこ四の上にきなるあ字
ちゝきき木とかく
白をゝき意にて 薄折敷 とかく
戀の字ハ心言をとるあ字
糸とかく
さいきゆゝさをとりて後 上のもの去
なり因て 経 とかく
昔唐土の大盗の盗跖とい山あり
道風の後をそれはさう〻手跡の上なれ九ハせ
盗 跡 きとなる ひ字 是をさうせきと解す

挽手の中ハ塵手を拂ふ
水鳥やめされよ

ひきの中へちりを入手を拂ひすつる故
鬢 栗 とかく
鬼責にて ハ風 とかく

門の内乃神鳴　かとととの中北留あて　唐糸と解

橘　立されはいぬ　ぬ　もすを　櫻なる乃ゑ

春日乃社　いぬさくらとゑんこうい

風呂の内乃連歌　なら神まて　奈良紙とゑんこう

魚とる鳥乃物ゑれ　連哥を句　ふとろとの中のくちなる乃ゑ　袋とゑんこうなり

京中まて夜明ぬ　魚とる鳥を鵜なり物忘いとんなる故

五輪の下ゑ化物　温純いとんとゑんこう

嫁入のあ〜ら　京中を五条なり夜あけたをきなる乃ゑ　五條の袈裟とゑんこう

墓の魔あて　墓の魔あて　袴とゑんこう

すハり舩　逢初の今朝あて　藍染の袈裟と解

板戸どちよ〜ら　水梨とも又　醤とゑんこう

いくどのとの字ちゑ立なる乃ゑ

いくちとゑんこう

下手乃鞠　落を踏あて　落し文とゑんこう

糸竹のいろは　吉野の

面ゑあるく　木の面行あて　紀貫之と解

辰　大内の女房衆をうす衣と解　卯過ぬ

海士人を海中と解　巳中

乃女　山椒産生　大原大腹　山家人楊櫨とゑんこう　卯次

小餅子持　水梨水無　煎海鼠入り子

人凡人又火事　海松産待　覆盆子居鬼

小町子待　鯉子居　人やとり

二見二身　小鯛子胎　常盤御前うゝハ彼の母なり　なりご中子

待宵 ことし月なり 子篭　聚あぐ姥 たゝミを女ゝ

太鼓 胎子ゝ　小鼓 子包ゝ　乗合舟 こすむゝ

小姓 子をゝ女なり 生字の形ゝ　小蟻 子有ゝ　小相撲 こすまひゝ

氷 子をりゝ　磯 海前なり　濱 仝上

恋病 子居病なり　暗 月なゝ　小くゞり

小松 子待ゝ　小蛙 子がいるゝ

車の上ゝ輿を旁かる

くるまの上いくの字こゝも尾をとる故

櫛くしとゝ

紅の糸腐り出とゝなる

紅の糸を云ハ工ゝ虫となるハ蚯蚓なる故

錆くりゝる鈔の先

さびを反九ハ ひさゝけゝの先ハけなる故

提子 ひさげ とゝ

切重ねる鱠生鳥

きりを重ねハきりゝゝなまゝのなまをとゝ切ハになる故 蟋蟀 きりぎりす とゝ

花の山ハ花なの木 桜の森ハ もゝの木

の木ハのゝゝ花のけハ山ゝもゝ そのけハ木林なる故 山もゝ とゝ

嵐の後 紅葉道を埋む

あゝゝの後ハゝゝの字ゝもゝ こゝ霜ゝ雨を

うゝめがもの字もゝ なる故 霜もゝ とゝ

春の農人

田をすゝくゝ 手襁 たすき とゝ

秋の田乃露 初もけなる そゝしきなる

穂垂みて 螢 とゝ

おもゝふもきのふも竹も篭りゝて

月なも 日なも おがまさり なる

三日くゝきの名 御神楽 とゝ

深山路ゝみゝまがゝれのうすもゝち

もゝちハちりゝてあとかゝるもなし

ちやゝうす

ちやゝ ちやまくゝ なる ハ

もゝちもゝちなる ハうゝなる故 茶 白ゝ

巣のくゝろゝなくゝこゝ 木兎 ふくろゝ

みゝのなるきゝ かきゝる ハ

ふくろゝのくゝろゝなきハ ふの字ゝ ゝゝつくゝみ

なる ハつくゝなり かきゝる ハ なる ハ 机 とゝ

うさも神ゝまのも同ゝ神なる ハ

うさもかゝゝ くゝまのも日ゝ かゝ なる ハ

ひらすゝとゝ ひらすゝとゝ

すゝとゝ も同ゝ かゝり みて 鶯 とゝ

亀五つ 些なゝ ゝと 蟹 とゝ

とゝ 中汐

とくハかよ五萬歳

乳を飲さしとておつとる
子奪ふとて　紅梅とく心

ちごのかしらなきハ法師ニハあらず
いなりおふけ
ちごの上なきハご二へ法しの尾をとりい
なかまおくれバ　ごいし　碁とく心

紫の上かくれし砌ハ源氏の跡をとゞめしもいかゞ
砌をかくりふ之団て
紙の字とく心

盃ねがハくハかハくことなかれ
さかつきハきつこねがハくかハくなかれ
ばねの字なるもきつねとく心

かゝ枝かるゝもゐし土となり
ことかたとりなるし
林の字かゝ枝かれ土となれハ杜の字若
ことなれハ若の字なる故　杜若　かきつばた　とく心

あハせハふくろひもんひハ
なかがやぶれぬ
あハせハふくろひもんび中やぶれる
かるあかび蛇とおとく心

そくちの子猿立なから
生るまし
廿　卩　立　生
薩　さつまぐさ　とく心

もろこし子年経てかつるをます
もろこしハ唐ニ年経てハ久しニ鯨
すつハ来る間なる故　唐廂車　とく心

壱匁
分銅ともとく　心を分十なる故ニ
一匁を
毛を千よすねもとる
毛氈　とく心

宿の柳ハ花の比花なし
やどのやなきハしの字ニ花のころ花なし
いころなる故　黄蘗とおとく心

女房のかミをりしるハこぶぎのハ
上もなし
女ちゝし上なきハ
きの字故　箒　とく心

大たくふさか杉原山
三紙山の意ニて　三上山とく心

たらちめの衣かへ心
たらちめを母なり更衣心を着氣なる
かみなもと木とみなりし心

雪を下より解て水の上をふ
ゆきの下とけぬれハ内となるこうづの上を
みすれバ　弓とおとく心

去年や今年の菊の霜かれ
去年や今年を二四季　きくのまもかれ
きの字なる故　みしきこ　とく心

雨ハ霰ハさてもを木の葉ハ
閑やうにて
桔梗とおとく心

うぶすなのねよりなるわり草を
人のもハばんことなし　おもいか
凡哥ハ三十一文字なるを此哥ハ三十二字あるなれ
おもふつふ乃字を除けりと意にて　ふ字のけ無

理とり拾とりたりし
冨士のけもりとおとく心

ミねのさる
十二支の内　巳子去ると　十支と以意ニて
泥とふしとく

あーさのおとり 梢の雪より取鳥の朝の字あさとよむあの下さの字をおくれば さと
ゝまとゝ 其あーまとゝをつなぐれば 佐々木四郎高綱とゝくゝ

たのむそなたゝめ五つめかさありてこ たんぽゝ むのうあゝかなのもとゝめ四の初の
すむもあだみごるもの河ゝ五つめいほの字ゝ河の字を二重ゝすまだゝ子
ずはぽゝなり依てたんぽゝとゝくゝ

白小袖うゝてゝ人のとゝれ法 小袖のうゝも綿もなくれは一重ゝ左りを
左をゝれい月りけもなし さゝ月夕けをきばくゝ故一重さくゝ也

きゝゝ木の下はすゝ侍せは 風あゝをたゝ公 本公 虫 とゝくゝ

さいしやう裸まなりて踊る さ衣裳もぐかすりておとれい
さの字あとる故 笹 とゝくゝ

燈火消り まくらの意あて 枕又座くらき故
あゝみて行は二里七里 柘榴さくろともゝくゝ 歩行九里あて かち栗 とゝくゝ
去のびかゝゝ 去のしをかゝよあは 火尉斗 とゝくゝ

粉糠味噌 来めかいまゝみをゝむゝなる故
嚊さゝ鼻かもか 本公 奥 とゝくゝ
海中ゝ草も春の恵あり かむなとハいをゝ意あて 狼 とゝくゝ
地ゝ比翼の鳥 海中の中ゝ藻すゝ春の恵を陽なる
裾模様夜ゝの部公 羽二重 とゝくゝ
地ゝ山の上ゝ孔雀ゝ 不見ゝ関うて 水ゝ菊 とゝくゝ
紋所ゝかゝの一門 高宮ゝこゝ
裾ゝあゝ寵愛の稚 唐團扇 とゝくゝ
なぞゝ子

海里十納年

海士　万里小路　納豆　去年

一樂殿　雅樂　遊殿　十尾　一小豆頭　小角豆　饅頭　一組

一月豆　月代　赤小豆　十二重　一方　其方　一挺

一百　八百　百文　一士納　武士　納豆　十尾

一士人　海士　舎人　一足　一大雲々　大和　出雲　一籃

一部甲令　服部　甲斐　一ツ　一舎斐驛器　食人　甲斐　土器　飛驛　五本

一匠十馬人　匠　要人　十俵　一三十野松　上野　松明　一桶

一明長　松明　一篭　一日野　朝日　下野　一行

一旅小男　旅竜　小男鹿　五本　一藏達　武藏　達ア　一荷

上の二文の銭を福人とんこく
意々吾唯足ることを知て
吾〜

田の中の十無〜
の意みて

田中十内
ひとうく

上の出如七ナるなる
これなり

上野傳七とんこく